

# 博多 VI

博多遺跡群第26次調査の概要  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第144集



1986

福岡市教育委員会

博多 VI 正誤表

直行	誤	正
4 F <sub>2</sub> <sup>8</sup>	10 m (27-4) (1/400)	20 m (1/200)
5 F <sub>3</sub> <sup>8</sup>	(1/100)	1/100
9 F <sub>14</sub> <sup>8</sup>	3 (遺物番号)	23
13 7	Fg24_47	Fg24_47
19 F <sub>41</sub> <sup>8</sup>	(1/3)	(1/2)
20	14世紀後半のもの	15世紀前半のもの (224)
27	4個付片	4個体分

## 序 文

古代から中世にかけて对外貿易の窓口として繁栄をみた「博多」の調査も民間開発関係だけで29次を数えるにいたりました。本報告書はその第26次調査の報告書です。

中世都市「博多」を物語る遺構・遺物が検出され、特に13世紀の木棺墓がほぼ完全な形で残されていました。

本書が市民の皆さまに、また学術研究の場で活用されることを念願しております。また調査に際して御協力や御指導を賜わりました方々に心から謝意を表します。

昭和61年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 佐藤善郎

## 目 次

第1章 はじめ	.....	1
第2章 発掘調査の記録	.....	4
第3章 博多遺跡群第26次調査出土中世人骨	.....	20
第4章 小結	.....	22

## 例 言

1. 本書は、ビル建設に先立ち福岡市教育委員会が調査を実施した博多遺跡群第26次調査（博多区上呉服町34番）の概要である。
2. 本書に掲載した遺物番号はすべてを通し番号とした。
3. 本書の執筆、編集は、力武卓治・太庭康時がこれにあたり、出土人骨についての所見は九州大学永井昌文・中橋季博先生に執筆をおねがいした。
4. 本書に掲載した遺構実測図は、力武・大庭のほか、山口満・池田光男・崎山伸一・副島智子らの作成による。遺物実測図・写真は、大庭が作成した。

# 第一章 はじめに

## 1. 発掘調査にいたる経過

博多遺跡群第26次調査地点は、福岡市教育委員会が博多遺跡群として周知している地域のほぼ中央にあたる。現在の国鉄博多駅から北西方向にまっすぐにのびて博多湾につながる道路を都市計画道路博多駅築港線と呼ぶ。この博多駅築港線の拡張工事に伴い、福岡市教育委員会では、昭和52年より発掘調査を実施してきた。その調査は、現在第4次調査にいたっているが、博多遺跡群第26次調査地点は、この博多駅築港線第3次調査地点に隣接する。

昭和59年7月、この地点にビル建設が計画され、福岡市教育委員会に事前調査願が出された。対象面積は134.25m<sup>2</sup>と、現地表面下4~5mに及ぶ博多遺跡群の発掘調査地としては、やや狭く危険でもあったが、ビル工事に先立って鋼板打ちこむ工程になっていたため、発掘調査は可能であると判断し、地権者及び開発業者との協議にはいった。その結果、発掘調査期間は1ヶ月、調査費用は原因者負担ということで、快く御了承いただくことができた。

発掘調査は、民間開発にともなう調査で、埋蔵文化財課第2係の分担であったが、第1係の力武・大庭が隣接する博多駅築港線第3次調査を同年2月より実施中であったため、これと併行して担当することになった。発掘調査は、5月17日より開始し、6月21日をもって終了した。尚、表土及び近・現代建物の基礎による擾乱部分は、大庭が立会し、開発業者が、除去した。

## 2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	的野ハツ子
調査主体	福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課
庶務担当	折尾学（第2係長・現第1係長） 飛高憲雄（第2係長） 松延好文
調査担当	松村道博（開発事前審査） 力武卓治 大庭康時
調査作業	山口嵩 池田光男 峰山伸 大部茂久 高田勘四郎 権藤利雄 三浦力 山崎光一 占賀博子 曽根崎昭子 尾崎文枝 村崎祐子 徳永通子 野口 ミヨ 長野康子 桑野弘子 江越初代 関政子 関加世子 黒木静子 高 野皓代 井手口美代子 副島智子
整理作業	鶴ちとせ 生垣綾子 井上友子 副島智子 北原章子 松本美保

なお、調査中、人骨の取り上げ、報告書作成の人骨に関する所見等、九州大学医学部解剖学教室第2講座、永井昌文・中橋孝博先生のお手をわざらわせた。また、地権者の的野ハツ子氏、建設業者高松組には、種々の御協力を賜った。記して謝意を表したい。

### 3. 遺跡の立地と歴史的環境

博多遺跡群とは、中世都市「博多」をその中核とする遺跡群であるが、弥生時代以降の諸遺構も包括した総称である。地域的には、福岡平野の博多湾岸に位置し、西を那珂川、東は江戸時代初期に開鑿された石堂川、南は石堂川開鑿以前に那珂川に向って西流していた旧比恵川によって画される。自然的立地としては、那珂川の右岸に形成された古砂丘上にある。

博多遺跡群の調査は、1977年2月の地下鉄祇園町工区の調査を最初とし、地下鉄関係の一連の調査の他、都市計画道路博多駅築港線拡幅工事関係の調査（現在第4次調査実施中）、29次に及ぶ民間開発にかかる調査がなされている。その結果、弥生時代中期前葉には、古砂丘上に豪棺墓を営んでいることがわかっている。古墳時代では、堅穴住居址・方形周溝墓などが調査されているが、1985年博多遺跡群第28次調査において、砂丘上に営まれた前方後円墳が確認された。歴史時代にはいって、博多は対外貿易の拠点として特異な発展をとげることになる。536年の那の津の官家の設置、688年を文献上の初見とする迎賓館の筑紫館をへて、842年には、大宰府鴻臚館の名がみられる。これらの施設は、いずれも博多遺跡群の範囲内に設けられたものではないが、大宰府の外港として博多湾が位置付けられたことは、その後の博多の発展を考える上で第一歩というべきであろう。その後894年の遣唐使の廃止、909年の唐物使派遣の停止などをへて、私貿易を中心となり、その拠点も鴻臚館から港津を容した諸庄園へと移っていった。このような動きの中で、博多は対宋貿易の中心となり宋商たちの博多居留がみられる様になる。1158年、平清盛が、1166年清盛の弟頼盛が大宰大式となり、半家は宋との貿易を直接的に掌握しようとする。中山平次郎博士によれば、清盛は貿易港として博多に「袖ノ湊」を築いたとされる。鎌倉時代には、2度の元寇で博多近辺が戦場となったが、13世紀末鎮西探題が設置され、貿易の中心地のみでなく、九州の政治的中心地という側面を持つにいたる。室町時代になり九州探題がおかれたがその支配力は弱く、筑前の小代氏、豊後の大友氏、周防の大内氏による争奪の対象となった。戦国時代にいたって断続的な戦闘が行われ、1587年島津氏の焼き打ちにより、灰燼に帰す。九州平定をとげた豊臣秀吉は、朝鮮出兵の兵站基地としての必要性もあり博多の再興をする。これが「大隅街割り」とよばれるものである。しかし、江戸時代にはいり、鎮国政策がとられるに及んで、貿易都市としての博多は幕をおろしたのである。

このような歴史を持つ博多遺跡群は、極めて重層的な複合遺跡である。最下層を形成する古砂丘の砂層の上に、浅い所で1m、深い所では5m以上におよぶ中世を主とした包含層が堆積している。今回調査した地点は、古砂丘の北辺に近く、袖ノ湊のなごりともいわれる新砂丘（息の浜）との間の入江に接した地点にある。また、地下鉄呉服町工区調査や第16次調査で、古砂丘の砂の面が急激におちこむという様相が判明している地点もある。

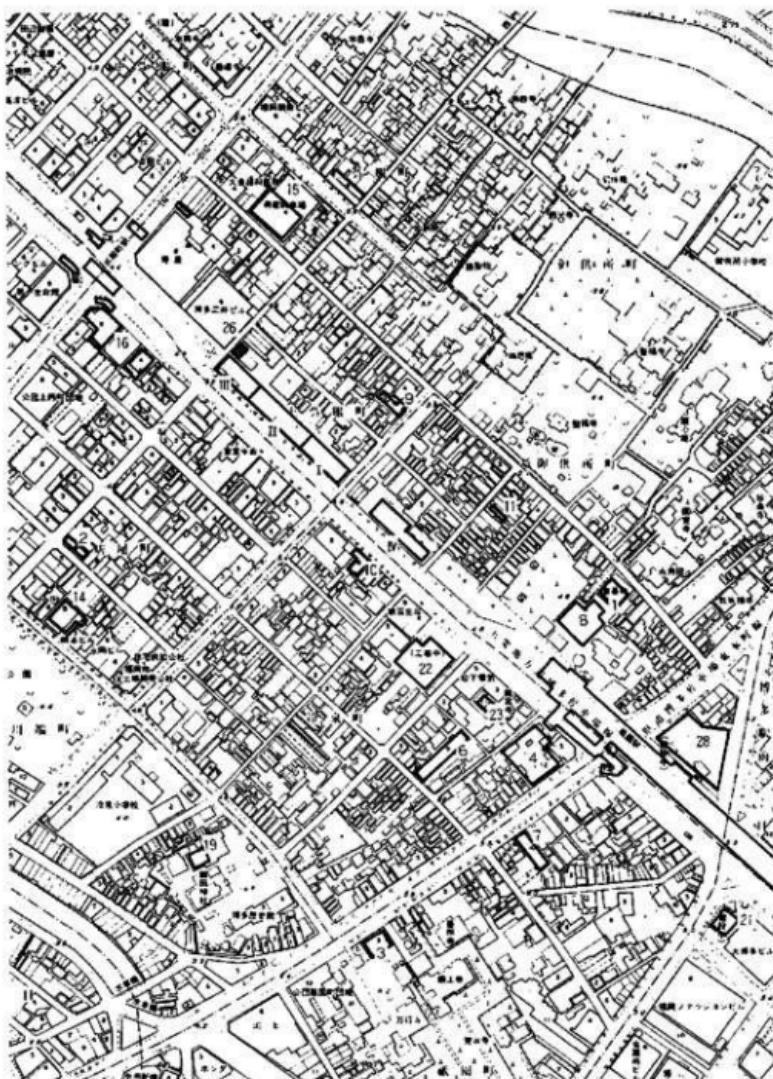


Fig. 1 博多遺跡群調査地図 (1/5,000)

(数字は調査次数を示す) 26……博多遺跡群第26次調査地点

I・II・III・IV……築港線第1次・2次・3次・4次調査地点

## 第二章 発掘調査の記録

### (1) 26次調査の概要と経過

発掘調査は、1985年5月17日に着手し、6月21日終了した。調査面積は、134.25m<sup>2</sup>である。四隅は、シートパイルで囲まれ、調査域内には10本のコンクリート杭が打ち込まれていた。このため、壁面に法をつける必要はなかったが、同時に壁面で上層観察することができず、調査区中央に長軸方向のトレンチを設け、土層を実測した。調査域の区割りは、築港線発掘調査の区割りに準じた。よって、南北にA・B区、東西にI・II区とし、A-I区～B-II区の4区にわけた。包含層山土器の取り上げも、この区割りによっている。

最初に遺構を確認した面を第Ⅰ面とし、以下掘り下げるにしたがって順次面を重ね、最終的には第V面までの調査を行なった。途中、第Ⅲ面まで調査した所で、シートパイルを固定するため、四隅と中央十文字に「田」字形に補強支柱がはいった。第V面の調査が終了したのは、6月20日であったが、この日A-II区で第V面から掘りこんだ5号トレンチに木棺の角が顔をのぞかせ、同日中に棺外に副葬品を入れた曲物をおいた木棺墓がほぼ完全な形で遺っていることが確認された。翌6月21日、木棺墓を精査し、九州大学医学部解剖学第2講座中橋孝博助手の御手をわざらわして、棺内に遺存していた人骨をとりあげ、同日午後9時全ての調査を終了した。

### (2) 層序について

本調査は、134.25m<sup>2</sup>と、最終的に深さ3～4mに達する遺跡の調査には小規模にすぎないため、当初から、十層の堆積状況の確認という点に力点のひとつをおいていた。そのため、全部で5本のトレンチを設定し、その内の1～3・5号トレンチについて実測図を作成した。各トレンチの内、1面から以下通して観察しているのは1号トレンチであり、2号トレンチはⅠ～Ⅲ面、3～4号トレンチはⅢ面以下、5号トレンチはV面以下を観察している。Fig. 3に示し



Fig. 2 第26次調査区域図 (1/400)

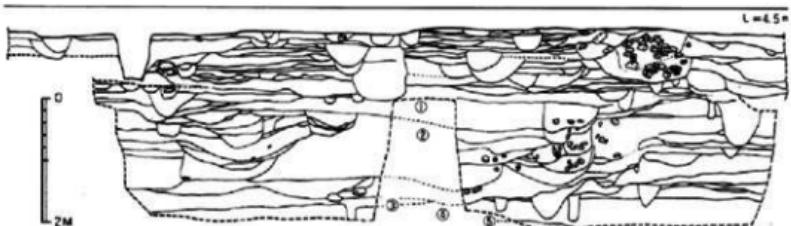


Fig. 3 1号トレンチ土層実測図 (1/100)

たのは、1号トレンチのものである。

土層の詳細は本報告に譲るとして、ここではあらましにふれておく。①層は、中世以後の包含層である。暗褐色土を基調とする。博多遺跡群に通有の土層であるが、細部にいたると各所で区々な有り方を示し、博多遺跡群の面的な把握を困難にしている。②層は、灰色砂質土。③層は、黒褐色粘質土で、植物遺存体を多く含む。調査区西側と北側に厚く堆積し、木棺墓もこの層に掘りこまれていた。④層、暗褐色土・黒褐色土等が多くまじる白色砂質土層。⑤層、黄灰色砂質土層。築港線第3次調査の結果より考えると、④層以下は11世紀以前の自然堆積であると思われる。

### (3) 第I面

標高4m前後の面である。焼土層の上面でおさえているが、部分的に断続があり、同時期性は断定できない。柱穴状のピットから数棟の建物を想定することも可能であるが、各柱が完全にそろうものはみとめられず、疑問が残る。少なくとも言えるであろうことは、柱筋の方位が若干のバラつきはあるものの、ほぼN-39°-Eの前後に集中しているという事である。これは、博多遺跡群における従来の調査より得られた知見。すなわち博多においては14世紀中頃以降、現在の街割り（大間街割り）よりわずかに東北-西南方向によった街割りがあったであろう、という仮定と大きくはずれるものではない。Fig. 4に示したのは、1-2が第I面出土、3



Fig. 4 第I面出土遺物 (1/4)



Fig. 5 第I面出土備前徳利（1/3）

口縁部を欠くため細かい検討は出来ないが、16世紀前半にさかのぼらないと思われる。これらの資料から第I面の時期を考えると、1は16世紀後半におかれる。また、土師坏・皿も、16世紀後半以降の特徴を示す。一方、I面下出土の3、4は、16世紀前半から中頃に位置付けることができる。これらの点から総合して、第I面の時期は、16世紀後半以降と考えておきたい。

が第I面から第II面へ掘り下げ途中に出土したもの（I面下とする。以下各面についても同様）である。1は、人物文を体部外面と見込み内にあしらった染付碗である。いわゆる饅頭心につくる。2は、体部外面と見込みに龍を描いた染付碗である。見込みの团龍文は、龍の表現が大分くずれているが、南京染付に類例がみられる。3は、蓮子碗である。4は唐草文を配している。Fig. 5に示した5は、備前焼の徳利である。



Fig. 6 第I面出土遺構（西南より）

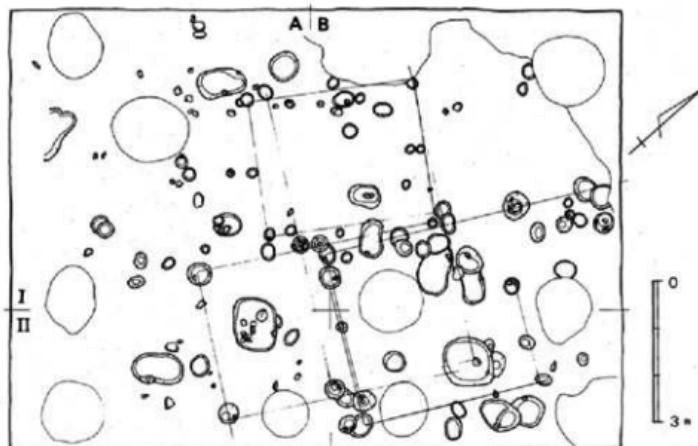


Fig. 7 第I面遺構平面図（1/120）

#### (4) 第II面

標高3.6m 前後にあたる面である。基本的には、暗褐色土を基盤にしている。調査区域の西端は、堆土の為のベルトコンベア設置のため、約1.5m 程調査を断念し、残してある。また中央には土層観察用の鞋をのこし、常に再検討ができる様にそなえた。

第II面ではB-I区において、一条の溝が検出された(1号溝)。Fig.17の第III面遺構図に土層図を付しているが、残念ながら溝の底付近を検出したのみで、あとはとばしてしまった。土層図の観察によると、標高4.0m付近から掘りこまれた溝と思われ、B-II区から東では底すら検出できなかった。幅90cmをはかり、方位は、 $N-43^{\circ}30'-E$ にとる。前述した室町期の街割り方向と一致する。1号溝からは、土師器の皿を数枚出土しているFig.10。口径10.4、底径7.8、高1.85cmをはかる。回転糸切り。大きさの割に重い土器である。

A-II区では、やはり街割り方向に集石土壙が検出されている。土壤の中に石を投げこんだ状態を示すが、土壤は1号トレントで確認したのみで検出していない。性格不明。

その他、建物の基礎になると思われる跡が多く検出できている。掘り下げ時にとばした



Fig. 8 第II面出土遺構（西南より）

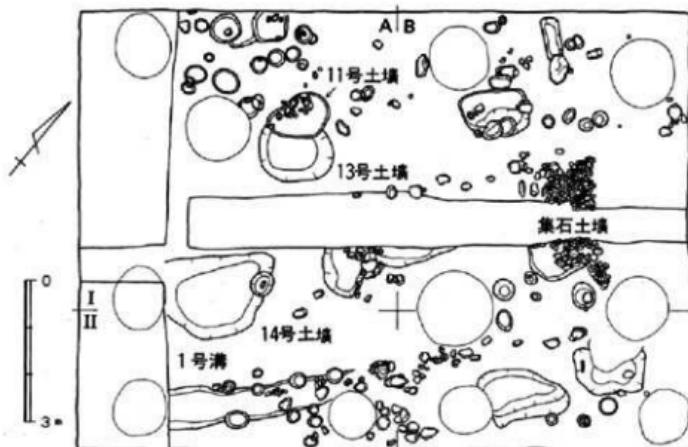


Fig. 9 第II面遺構平面図 (1/120)

ものもあると思われ、建物の平面形をさぐるのは困難である。

次に、各遺構出土の遺物について目立ったものについてのみ簡単にふれておく。

7は、14号土壙から出土した「天祐通寶」である。磨滅しているが、遺存状態は良い。15号土壙からは、「政和通寶」が出土している。8・9は遺構検出面より出土した「政和通寶」・「洪武通寶」である。第2面では、全部で27枚の銅錢が出土した。

11号土壙からは、備前焼の壺が出土した。Fig.12. 脇部に櫛描波状文、胴部にヘラ記号を持つ。口径12.2、底径14.1、高26.7、胴部最大径23.05cmをはかる。赤褐色に焼きあがっている。備前焼のIV期末からV期初頭、16世紀初頭のものである。<sup>(註1)</sup>

Fig.13にあげたものは、13号・14号土壙の出土遺物である。13号土壙の土師皿には、口径6.2前後、6.5前後、6.9cm前後の3種がある。14号土壙出土の土師皿は、口径6.6~7.1cmであるが、底径が3.2cm前後で体部が直線的もしくは、外反気味に開くものと、底径4.8cmで体部が丸味をもって立ち上がるものの2様がある。土師環にも2様があり、土師皿の前者を大きくしたタイプのもの18・19と、底径が大きく体部が直線にのびるものとがある。口径は10.3~10.9、底径は前者で3.5~4.0、後者で6.6cmをはかる。20は、褐釉の壺の小片である。赤褐色の精良な胎土に、緑褐色の釉がうすくかかっている。口唇部内面は、釉をけずりとり、内面は施釉されていない。口径6.7cmをはかる。21は、白磁の碗で、外底に墨書がみられる。22は古赤絵の盤である。体部外面と内面とは牡丹唐草をあしらい、口

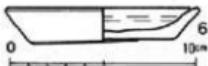


Fig. 10 1号溝土器 (1/3)



Fig. 11 (1/2)

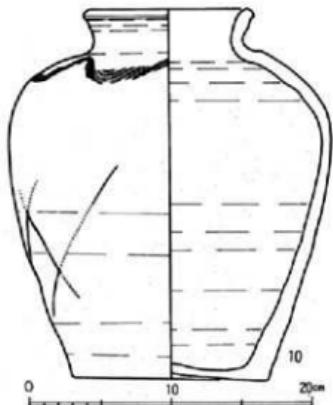


Fig. 12 11号土壙出土備前壺 (1/4)



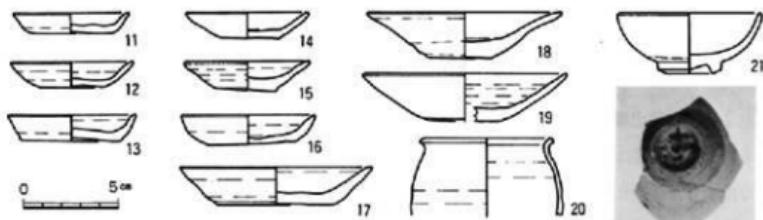


Fig. 13 13号・14号土塚出土遺物 (1/3 - 22は1/5)

縁内部に四方襍文、見込みに波濤文帯を配して鳳凰を描く。嘉靖期のものである。口径30.5、底径18.3、高6.5cmをはかる。火をうけており、すすの付着や、変色がみとめられる。

Fig. 14に示したのは  
遺構面より出土した染  
付皿である。口径9.3、  
底径3.6、高2.6cmをは  
かる。

以上の遺物は、いず  
れも16世紀前半代の特  
徴を示すものである。  
したがって、第II面の  
年代を16世紀前半から  
中頃にかけての時期と  
考えたい。



Fig. 14 第II面出土染付皿 (1/2)

## (5) 第Ⅲ面

標高3.25m前後の遺構面である。土層としては、第Ⅲ面より上位は、厚さ数cm～10cm程度の薄い土層が、ほぼ水平方向に縞状に堆積しているという特徴を持つ(Fig.15)。この土層の成因については、縞状の堆積の途中から掘りこまれている遺構がある点、第Ⅲ面から第Ⅰ面までに100年程度の時期幅しか与えられない点などから、すべてが洪水その他による水成層とは考えがたい。一方、整地層にしては、あまりに整いすぎた縞状の堆積を示している。現段階では断言できないが、一応整地層としての可能性を考えるにとどめておく。

その縞状の堆積の途中から掘りこまれた土壤墓が、第Ⅱ面からの掘り下げ途中で検出された。



Fig.15 第Ⅰ～Ⅲ面土層堆積状況



Fig.16 第Ⅲ面出土遺構(西南より)

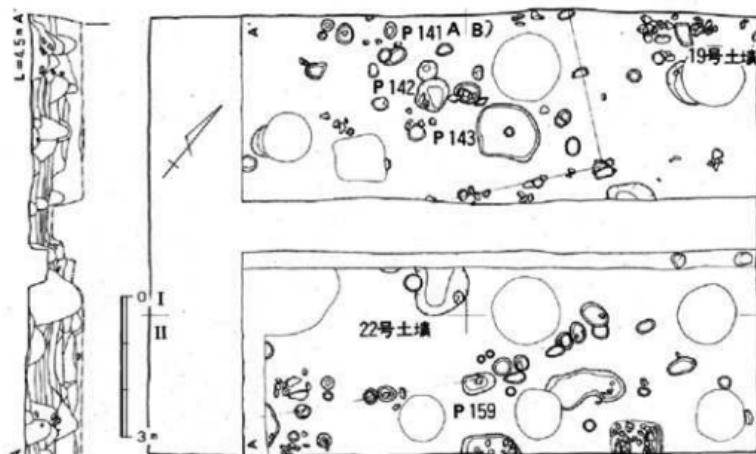


Fig.17 第Ⅲ面遺構平面図(1/120)

Fig.20-(2)は成人頭骨のみの再葬で、ギリギリの大きさの穴をほり、すでに白骨化した頭骨を落しこんだと思われる。頭頂部を下に向いているにもかかわらず、下顎が右頬の横に接しておちこんでいる状況及び頭骨が一片もまじっていないことが、それを物語っている。Fig.20-(3)は、幼児の埋葬である。両方とも土壌の掘り方が第II面より下で掘りこまれている事は、明らかである。第II面及び第III面の年代観から推測して、16世紀前半ごろの埋葬と考えられる。

第III面からは、25枚が一連になった銅錢が出土した。中央の孔に纖維痕跡を認めることはできなかった。内訳は、「洪武通寶」23枚、「祥符元寶」1枚、「祥符通寶」1枚である。図示したのは、24が「祥符元寶」、25が「祥符通寶」他は「洪武通寶」である。

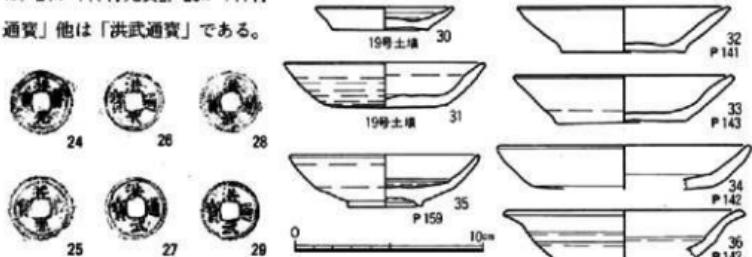


Fig. 18 第III面銅錢 (1/2)

Fig. 19 第III面出土遺物 (1/3)

Fig.19に図示したのは、第III面の各遺構出土の遺物である。出土遺構は、実測図中に記した。30の土師皿は、口径7.3、底径7.3、高1.25cmをはかる。31は、口径10.7、底径5.6、高2.4cm、32は、11.4—6.7—2.4cm、33は、11.7—6.9—2.05cm、34は、13.5—9.7—2.4cmをはかる土師環である。35は、全面に灰青色の釉をかけた高麗青磁の皿の破片である。口径10、底径4.1、高3.8cmをはかり、見込みと疊付に重ね焼きの目痕がつく。36は白磁の皿である。白濁した半透明の釉を、にぶい白色の胎土の上にかけている。

第III面の土師皿・坏は、16世紀初頭の特徴を示している。また、III面下の土師器は、15世紀後半のものと思われる。よって、第III面の時期は、15世紀末から16世紀にかけてと考えたい。

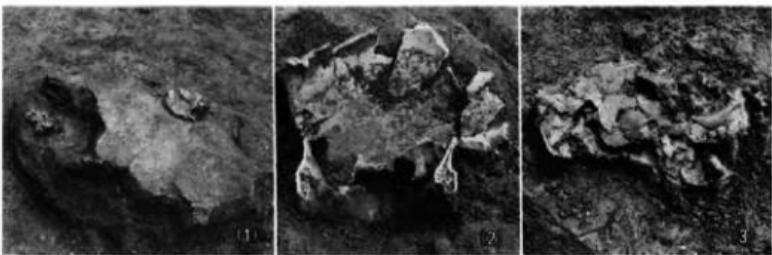


Fig. 20 II面下人骨出土状況

## (6) 第IV面

第IV面は、標高2.8m 前後でおさえている遺構面である。前述した様に第III面を終了した段階で、シートパイルを支持するH鋼が十文字にあてられたため、調査区は4分割されている。

遺構として検出できたのは、柱穴状ピット・不整形土壙・礎石・配石などである。遺構全体としてのまとまりは認められない。以下、主な出土遺物について略述する。Fig.23に示したのは、27号土壙出土遺物で、37・38が土師皿、39・40が土師壺、41は白磁皿である。37は、口径8.2、底径6.2、高1.6cmを、38は、8.6-5.8-1.45cmを有する。土師壺では、39は、口径12.2、底径7.2、高2.5cm、40は、13-8.8-2.75cmを有する。41の白磁皿は、高台疊付を削り3点で接地するもので、高台少し上から外底部にかけては露胎になっている。見込みには、三点の目痕がつく。口径10、高台径3.8、高2.3cm、磁器で

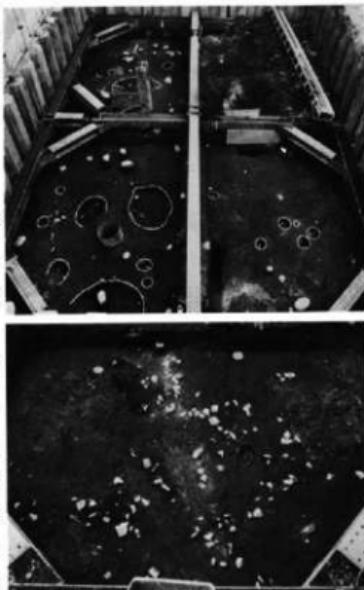


Fig. 21 第IV面出土遺構（西南・東南より）

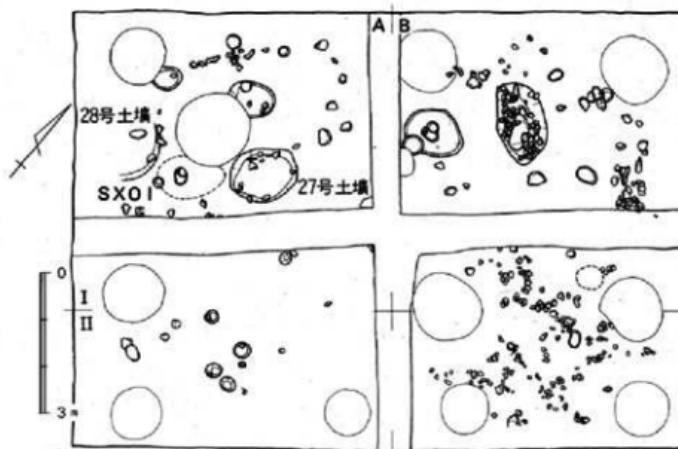


Fig. 22 第IV面遺構平面図 (1/120)

は、この他に鎧蓮弁文の青磁碗片が出土している。27号土壌からは、銅錢10枚も出土している。Fig.24-42~46。解読できたのは7枚で、「天符通寶」・「元祐通寶」・「元豐通寶」・「熙寧元寶」・「淳化元

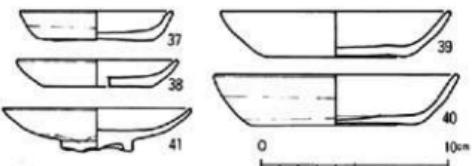


Fig. 23 27号土壌出土遺物 (1/3)

寶」各1枚、「皇宋通寶」2枚である。そのほか、銅の小柄(刀子部分は鉄製)が出土した。Fig.24・47~49は、第28号土壌出土の銅錢である。28号土壌からは、18枚の銅錢が出土し、「開元通寶」「軋元重寶」「祥符元寶」「元豐通寶」「熙寧元寶」「祥符通寶」「嘉祐通寶」が各1枚判読できている。

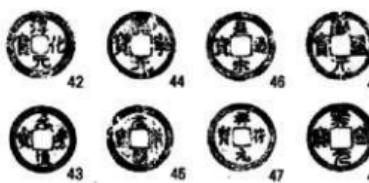


Fig. 24 27号・28号土壌出土銅錢 (1/2)

Fig. 25・26に示したのは、IV面下の出土遺物である。Fig. 25は、備前焼IV期前半の資料で14世紀末～15世紀初のものである。Fig. 26-55~58は青磁、59・60は白磁であるが、14世紀中葉から15世紀前半の資料を含む。第IV面出土遺物は細片が多く、時期が決めがたいが、以下の点から15世紀前半～中頃を考えたい。

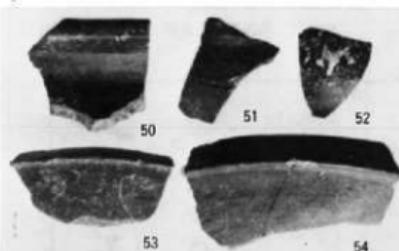


Fig. 25 IV面下出土備前陶器 (1/4)

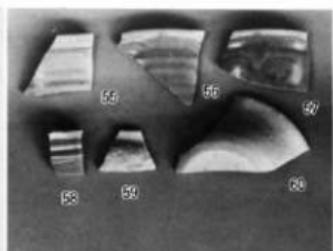


Fig. 26 IV面下出土青磁・白磁 (1/4)

## (7) 第V面

第V面は、今調査での最終造構検出面で、標高2.1m前後をはかる。前述した様に、調査の安全を考え、また排土が困難になった点もあわせ、調査はこの面で断念し、以下についてはトレチを入れたが、その結果、標高1.4m前後でピットを確認している。

第V面で検出された造構は、杭群、石積造構、土壌、排水溝などである。杭群は、調査区北東すみで検出されたもので、1.5×2 m位の範囲に不規則に30本以上の木杭を打ちこんでいる

もので、標高2.7m ではほぼ水平に板状の木質が拡がるのを確認している。杭群を切ってトレーナーを入れたが、性格・用途ともにわからなかつた。石積遺構は、調査区北東すみ近くで検出されたもので、積石の面を南東方向にむけて揃えている。土壤を掘った後、石を積んだもので、土壤底からの現存する高さは58cmをはかる。調査区西辺は、横にはり出したH鋼の為調査していないので西にのびる可能性は大きい。

土壤は、A—I区において4基検出されているが、特筆されるのは、31号土壤である。31号土壤からは、2つのタイプの土師壺が集中して出土し、現在接合・復元をすませているものだけで15個体以上、整理を終了すればおそらく20個体は越えると思われる。Fig.29—61のタイプは、口径13~13.6、底径8.7~10、高3~3.2cmをはかるものである。62のタイプは、上に比べ、体部が開き気味になるもので、口径13.7~13.9

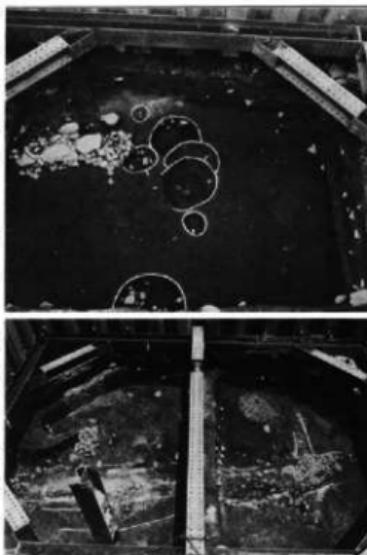


Fig.27 第V面出土遺構（東南・西南より）

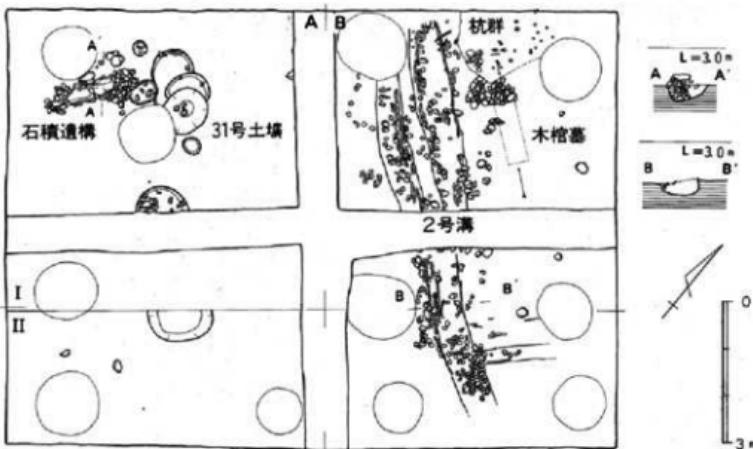


Fig.28 第V面遺構平面図 (1/120)

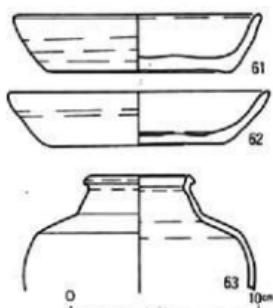


Fig. 29 31号土壤遺物 (1/3)

底径8.7~9.3、高2.8~3 cmである。63は、褐釉の小壺である。破片であるため断言できないが、耳の痕跡らしいものが認められ双耳壺になると思われる。この他、玉縁口縁の白磁碗片も出土している。13世紀前半から中頃の土器と思われる。おそらくは一括廃棄であろう。

A-II区・B-II区を突切って、2号溝が検出された。両側に板をたて所々を杭でおさえた構造のもので、砂が厚く堆積していた所から、水が流れていたものと思われる。特にB-II区では、東に枝分れしている状態がうかがわれる。

Fig. 29 31号土壤遺物 (1/3) る。水は東から西に流れ来て、本線に合流し、本線は南から北に流れ行く。A-II区では、溝が2本みられるが、おそらく西側のものは改修もしくは、後で付け足した流れであろう。出土遺物は、Fig. 31に示した。64~67は土師器、68は瓦質土器の鉢、69は瀬戸灰釉の仏花瓶、70・71は青磁である。これらの遺物は、13世紀中頃におかれ  
る瀬戸の仏花瓶を除いて、いずれも新しい様相を示している。Fig. 30でも、2号溝の掘りかた  
(註2) が、かなり上から掘りこまれている様子がみられる。一応14世紀代を考えておく。



Fig. 30 2号溝断面 (東南より)・側板 (西南より)

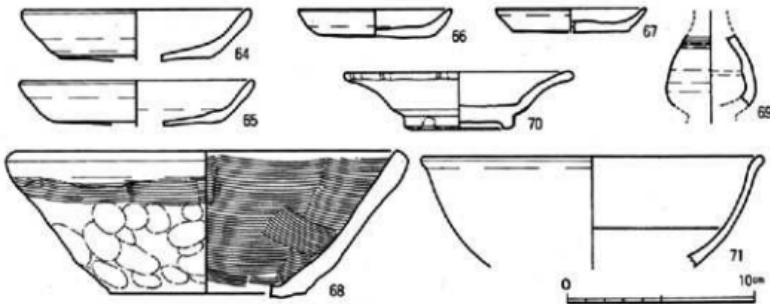


Fig. 31 2号溝出土遺物 (1/3)

## (8) 木棺墓

木棺墓は、第V面調査終了後、A—I区の杭群にトレントを設定したところ、木棺の頭側小口板にあたり発見されたものである。第V面上では、木棺墓の掘りかたは確認できず、同トレント壁面で検出につとめたが、土壤を掘り込んでいる層も土壤内の埋土も黒色の腐植土のため、土壤の掘り込み面は確認できなかった。木棺のちょうど頭位にあたる第V面上に、石積造構がみられる。石積造構は一辺を幅100cmで直線にそろえるが、他辺はそろわざ、方形を意識したものかどうか判明しない。また石積造構と木棺とは、レベルにして約1mの差があり、木棺に伴なうものとしては、やや浮きすぎている様に思われる。

木棺は、蓋材の中央がややおちこんでいたが、ほぼ完全な形で検出された。木棺の長辺は、155、小口45、深さ25cmで、蓋板3枚、小口板、長側板はそれぞれ1枚、床板は3枚で構成されている。

木棺の西側には、木棺に接して曲物がおかれていた。曲物は土圧でつぶれていたが、曲物内には、青磁碗1、土師皿4が副葬されていた。木棺東側には、2本の角棒と1本の竹棹が棺と平行しておかれていた。角棒は長さ140cm、断面7×5cmのものと、長さ120cm断面6×4cmのもので竹棹は、径3.5cm、長さ113cmを測る。木棺下には、頭位側と足位側にそれぞれ長さ70cm程の木材が、長軸と直交しておかれていた。加工はされているが、荒けずりのまま、面をきちんと取って棒状にそろえたものではない。

木棺内には、人骨がほぼ完全な形で残されていた。かるく膝をまげた伸展葬で、両腕は体にそって伸している。指骨や鎖骨などの小骨は原位置を保っていない。頭骨も下顎から著しくはずれている。棺内の頭位には木枕がそえられており、その位置からすると、頭を木枕にのせて西面していたと思われる。頭骨の下には、銅鏡1面、櫛2枚、齊串1枚が重ねられていた。

Fig.38に図示した76～79は棺外曲物内副葬の土師皿である。回転糸切り底に板目痕を留める。口径9～9.3、底径6.2～6.8、高1～1.25cmをはかる。80は、曲物の蓋材の上にのって出土した土師塙である。内外面ともみがかれている。81は曲物内出土の青磁碗である。見込みに雲文をあしらい外底は疊付から



Fig.32 木棺墓（東より）

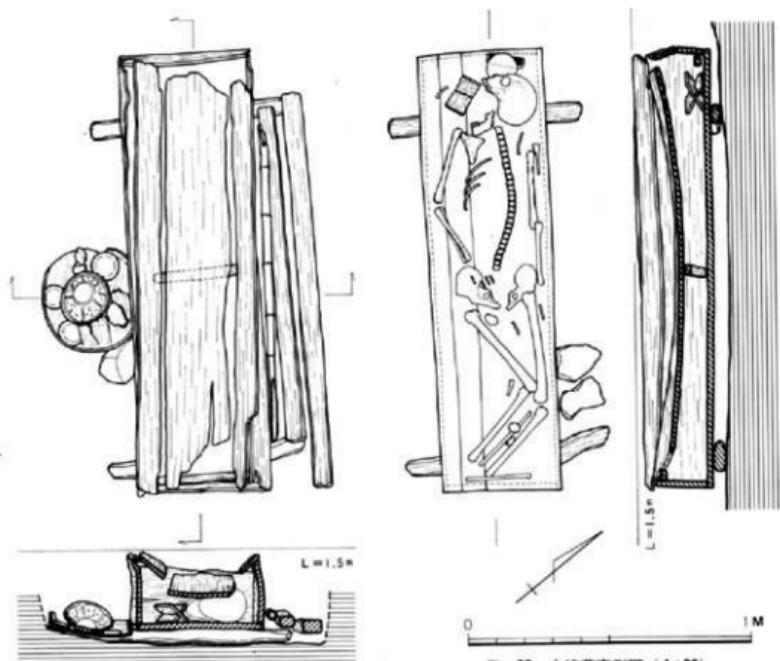


Fig. 33 木棺墓実測図 (1/20)

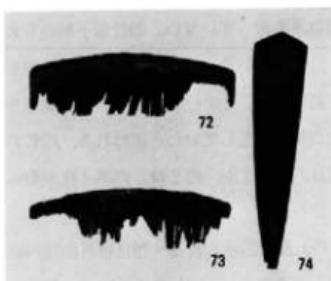


Fig. 34 木枕出土状況

← Fig. 35 鏡・斧出土状況

↑ Fig. 36 木棺内副葬遺物 (約1/4)

露胎で、高台内に、「上」の墨書をもつ。口径16.8、高台径5.1、高7.25cm、銅鏡は、径10.8、厚0.1cmを測る。木櫛は、とき櫛とすき櫛が各一枚あり、長さ13.1、幅4.0、厚0.9cmをはかる。齊串は長さ15.4cmで文字は認められない。木枕は、長さ14.5、幅8.2厚さ2.1cmの二枚の板に、各々長さの中央にスリットを入れ、差しあわせた簡単なものである。



Fig. 37 木棺墓出土木枕

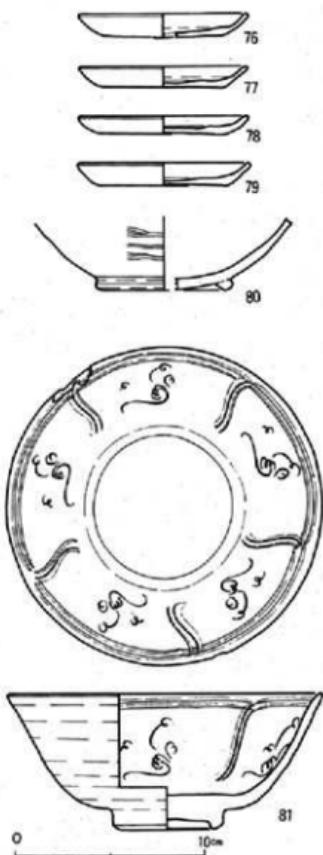
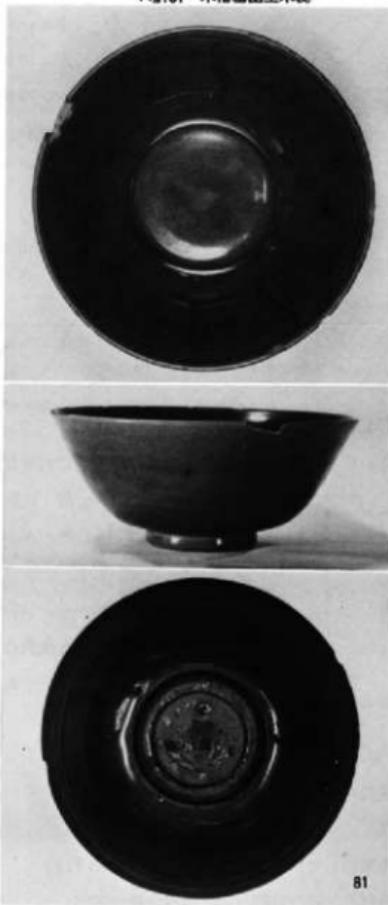


Fig. 38 木棺墓副葬土器 (1/3)



## (9) その他の出土遺物

各造構面とは別に、掘り下げ途中に出土した多くの遺物がある。詳細は本報告に譲るとして、その一部を写真と実測図で紹介しておく。(以下法量については、口径—底径—器高の順)

Fig.39: 他地域からの流入品と考えられる白色系土師器。82は、いわゆるヘソ皿で、畿内の14世紀後半頃のもの。6.8—2.8—1.9cm, IV面下出土。83はIII面下出土。5.8—4.05—4.5cm。

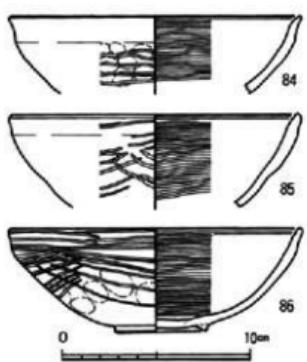


Fig.40 楠葉型瓦器塊 (1/3)

Fig.40: いわゆる楠葉型瓦器塊である。今調査出土の瓦器は、大半がこのタイプ。11世紀後半から12世紀前半。84・85は口径15.7cm, 86は15.8—5—5.5cm, 84は第V面, 86は中央トレンチ, 85は3号トレンチ。

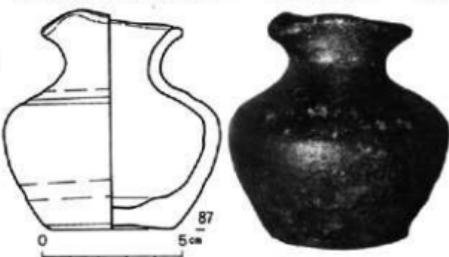


Fig.41: 古備前小壺。完形品、III面下出

Fig.41 (1/3)

土。5—4.4—7.8cm, いわゆる雀口、肩に自然軸がとぶ。14世紀後半のもの。

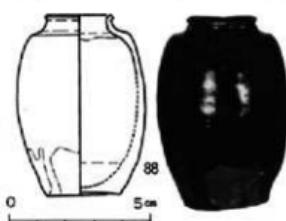


Fig.42 鉄軸茶入 (1/2)

Fig.42: IV面下より出土した肩衝茶入。完品。黒色を呈する鉄軸がかかるが、火を受けているらしく軸表面がややあれる。2.3—2.5—6.5cm, 左糸切り。隣接するSX01の遺物から、14世紀前半の時期があてられる。今調査及び築港線第3次調査では、肩衝、大海など茶入片が多く出土している。いずれもいわゆる唐物で鉄軸がかけられている。

Fig.43: 鹿角製の装飾品。鹿角の付け根の部分を加工し、文様の刻みには漆を象眼している。II面下 外径4.2cm、内径2.1cm、使用状態は不明。



Fig.43 (1/2)

Fig.44: 石製の鏡である。4個付片出土している。90はIII面下、91は22号土壙とIII面下、92はI面下



Fig.44 石鏡 (1/4)

### 第三章 博多遺跡群 第26次調査出土中世人骨

九州大学医学部解剖第2講座

中嶋孝博・永井丹文

1985年5～6月、福岡市博多区上糸服町において、ビル建設とともに発掘調査が実施され（博多遺跡群、第26次調査）、計3体（成人2体、乳児1体）の中世人骨が出土した。少數例ではあるが、内1体はほぼ全身骨を遺存しており、この北部九州地方では始めての保存良好な中世人資料となるものである。紙面の関係上、計測値による詳しい比較検討は別の機会にゆずるとして、以下にその概要を報告する。

#### (A). 26-1号人骨

地表下、約4.3～4.6mの木棺墓中に見出されたもので、棺外に吉磁器1個と土師皿4枚、棺内の頭蓋下に銅鏡1面、木櫛2枚、斎弔1枚を伴なっていた。これら伴出遺物や層序等、考古学的見地から、13世紀前半の人骨と考えられている。四肢骨端や軸幹骨、及び頭蓋の一部に欠損があるものの、保存状況はかなり良好ではほぼ全身骨が遺存している。

(性別、年齢) 骨盤、四肢、及び頭蓋の観察、計測所見は明らかに女性的特徴を示しており、又、頭蓋主縫合の締合度や歯の咬耗度等から既に熟年に達した人骨とみなされる。

#### (人骨形質)

まず脳頭蓋における特徴として、かなりの長頭性と高頭傾向が指摘できる。頭長幅示数は74.2で長頭型 dolichokran に属し、長高、幅高示数もそれぞれ、高、尖頭型に入る。

また、顔面部では、扁平な鼻根部や、強度の歯槽性突顎といった中世人的特徴がみられる一方、上顎高を始めとした高径がかなり大きく、Kollmann の上顎示数は53.8で中上顎型 mesen に属す。ただ、眼窩は幅径が著しく大きいために、かなり低眼窩に傾く。なお、咬合形式は、上顎切歯が前方に強く突出して、いわゆる屋状咬合を呈していた。

四肢骨は全体的にかなり長いが、骨幹部指標は他の中、近世人の平均値を下回っており、華奢である。なお、断面形状に、それ程の柱状性、扁平性は認められない。

大腿骨最大長から Pearson 法によって推定身長を求めてみると、150.4cmとなり、中世人女性としてはやや高身長である。

#### (B). 26-2号人骨

地表下2.3～2.5mの小穴中に見出されたもので、頭蓋の他は一片も見当らないが、保存状態は良好である。なお、本例はその出土状況において、下頬が通常の腐敗等によるずれとは考え難い位置から見出された点や、上位頸椎が存在しないこと等から、いずれか他所において既に

白骨化した頭蓋を持って来てこの小穴中に埋めたものと推察される。

副葬品はみられないが、層序等、考古学的な検討によって、16世紀前半頃の、ほぼ戦国時代の人骨と考えられている。

(性別、年齢) 筋付着部の発達度や、縫合、歯牙等の観察所見、及び各部の計測値から、男性、熟年人骨とみなされる。

#### (人骨形質)

頭長が著しく大で、示数も73.3とかなりの長頭型を示す。また、顔面諸径は概して大きく、特に高径が大で、示数的にもかなりの高顎傾向を示す (Kollmann 上顎示数: 52.8、中上顎型)。鼻根部は扁平性が著しいが、26—1号人骨のような、強度の歯槽性突顎は認められない。

#### (C). 26—3号人骨

26—2号人骨から約70cm程離れた小墓拵中に見出されたもので、所属時期は、26—2号人骨同様、16世紀前半頃と推定されている。遺存状態は悪く、頭蓋片他、上位肋骨、頸椎、及び上腕骨片のみが確認し得た。

主に歯の萌出状況から、生後8～9月の乳児とみなされる。

我国における中世人骨の出土例としては、鈴木尚らによる鎌倉材木座 (1956)、関東空町人 (1969) の他、近年、山口県の吉母浜 (中橋、永井1985) からもまとめられた資料が報告され、その中で、中世人は、長頭、低顎、強い歯槽性突顎、扁平な鼻根部といった特徴をもつことが指摘されてきた。ここで報告した2体の成人骨は、性別や所属年代を異にするものの、両者ともかなりの長頭性を示し、鼻根部も扁平で、特に26—1号女性人骨では著しい歯槽性突顎も確認され、上記の中世人形質が、当時の人々の間でかなり共通した特徴になっていたことを改めて示唆する結果となった。しかしながら、その一方で、共に顔面高径がかなり高く、いずれも中上顎型を示したこと、吉母浜中世人にもみられた当地方の中世人の地域性を顕わしたものとも考えられ、この点は、高顎、高身で特徴づけられる北九州、山口地方の弥生人以後の形質変化を考える上で、今後、注目すべき点になるかと考える。

(当人骨を研究する機会を与えて下さった福岡市教育委員会の諸先生、諸士に深謝いたします)

#### 文 獻

鈴木尚、他 (1956) 「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」 岩波書店

Suzuki,H. (1969) Microevolutional changes in the Japanese Population from the prehistoric age to the present day. J. Faculty of Science, University of Tokyo, III: 279～309

中橋孝博、永井昌文 (1985) 「山口県下関市吉母浜遺跡出土人骨」 吉母浜遺跡、下関市教育委員会: 154

## 第4章 小 結

以上、極めて簡略ながら、博多遺跡群第26次調査の概要について述べてきた。詳細な報告は、築港線第3次調査の報告書に付載する予定なので、調査の総括的なまとめもその機会に譲ることとして、とりあえず気が付いた2、3の点について記す。

(最下層の遺構について) 第26次調査において最も漸る遺構は、トレンチの土層観察で確認されたピットである。標高1.4m前後から、暗褐色土や暗灰色土を互層状にまたは斑間に交える白色の砂質土にほりこまれている。今調査では第V面以下の遺構は、調査の安全及び、排土が困難であるなどの点からトレンチによる土層確認にとどめた。そこで、隣接している築港線第3次調査の成果(未だ整理途中ではあるが)を援用して、最下層の遺構について考えたい。築港線第3次調査の最終遺構面第VII面の基盤層は、B区(南北方向の区割りは、今調査と共通)の南4分の1あたりを境に、南は黄白色砂、北は暗褐色土・暗灰色土を互層状・ブロック状に交える灰白色砂にかわる。博多遺跡群で一般に最終遺構面の基盤となっているのは、この黄白色砂層である。黄白色砂層は急角度で灰白色砂層の下にもぐりこんで行き、その部分にはもはや遺構は存在しない。灰白色砂層は、その堆積の状況から水中で堆積したものと考えられる。特にB区中央から北側には、植物遺存体を含む黒褐色粘質土層からうすく水平にのび、水がついていたことを示している。第VII面では、この灰白色砂層を切りこんで白磁碗を副葬した。11世紀後半の土壙墓が検出されている。一方、灰白色砂層からは、8世紀以前の須恵器が出土している。したがって、9世紀から11世紀の間に完全に陸地化し、11世紀後半には生活面にとり入れられていたことが推定できる。第26次調査の最下層遺構は、この時期のものと思われる。

(木棺墓) 前述した様に、掘りこみ面は確認されていらず、また第V面の石積遺構との関連も考えがたい。この木棺墓に非常に類似した例として、太宰府第38次調査で出土したSX863がある。SX863は、平安時代末期の木棺墓で、木棺は長軸1.55m、小口0.51m、残存高0.17mを有する。土壙底部に3本の丸太を据え、その上に直交して木棺を置いている。今調査の木棺墓は、13世紀前半のもので、時期的にはやや下るが、木棺の構造、葬法等、共通点が多い。まず木棺の構造であるが、釘をほとんど使っていない。SX863では、小口、側板などの接合法は腐蝕により不明で、鉄釘の出土をみない所から釘留めではないとしている。本例は、小口を長側板が両側からはさんで組み合せている。埋葬方法であるが、本調査例の木棺墓東側にならべられていた角棒・竹棒が興味深い。これらは、何ら副葬品としては意味を持たないものである。また角棒は、丁寧に加工された角材であり、折れてもいはず、廃材を捨てたとは考えられない。あくまでも推論にとどまるが、木棺を運ぶ際に使用したものと考えたい。すなわち、まず木棺の下にこれと直交して2本(SX863では3本)の丸太をおく。次に、これから繩をかけ、丸太と同

じ方向に角材を通す。今調査例ならば角材は2木、SX863ならば3本が必要となる。そして、木棺の両側からこの角材を扭いで木棺を運ぶのである。本調査例では少なくとも4名、SX863では6名がこれに従ったことになる。埋葬後、忌を嫌ってか、この角棒を墓壙内に廻東したのではないかと思う。

なお、木棺墓では、人骨に若干のみだれがみられた。これは、人体が白骨化してから、木棺内が土砂でうまるまでの間に、木棺内に水がたまる状況があり、小骨が水にういて移動したものと考えている。

(街割りについて) 博多遺跡群では、二種の街割りが想定されている。東西・南北を示すものは、11世紀後半の遺構からみられ、14世紀前半で廃止される。ついで、N-30°~42°-Wを示す街割りがなされ、これを踏襲して豊臣秀吉による太閤街割りがなされることになる。第26次調査の各面の遺物・溝は、後者の方位を示している。ただ、偶然なのかも知れないが、木棺墓の主軸方位及び、第V面で検出した13世紀後半と思われる石積遺構の方位がこの後者の方位と一致している点が注意される。從来、この街割りの転換は、鎌倉時代末期から室町時代にかけての軍事的・政治的動乱及びそれからの復興を契機とすると考えられている。今後の調査例の増加をまたなくてはならないが、新街割りは13世紀代から部分的、萌芽的に出現していたのではないだろうか。多々良浜の合戦以後設置された九州探題が、実質的には無力にすぎないことを考えると、室町時代初期の一時点に画期的な転換期を求めるに躊躇せざるをえないものである。

第26次調査の遺物整理は、まだ進行中である。今回は、金属製品・板碑・木製遺物(卜駄・漆器等)については全く触れることができなかったことをおことわりしておく。

註1. 倉敷考古館 間壁忠彦・藤子氏の御教示による。

註2. 淄川市教育委員会 藤澤良祐氏、愛知県陶磁資料館 仲野泰裕氏の御教示による。

註3. 高槻市教育委員会 橋本久和氏の御教示による。

註4. 倉敷考古館 間壁忠彦・藤子氏の御教示による。

記して謝意を表します。

---

博多 VI  
博多遺跡群第26次調査の概要

福岡市埋蔵文化財調査報告書第144集

1986年（昭和61年）3月31日  
発行 福岡市教育委員会  
印刷 株式会社 川島弘文社

---

